

2019年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

他者と共に「生きる」を紡ぐ
—HIV陽性者の治療中断と継続のエスノグラフィ—

学位の種類： 修士（看護学）

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号：18894704

氏名：首藤 真由美

(指導教員名：野村 亜由美 准教授)

抗 HIV 薬は 95%以上の服薬率を保つことで、HIV 陽性者を死から遠ざけることができる。それにもかかわらず、HIV 陽性者が自ら治療止めるとはいかなる理由があるのだろうか。

本稿では HIV 陽性者 2名のインタビューを行い、彼/彼女における HIV や治療の位置づけ、そして HIV と共にどのように生きているのかを明らかにした。

彼/彼女らの語りから明らかになった事は、第一に、「自分がなぜ HIV になったのか」という自分にとっての病気の意味を見出すことで、受け入れ難かった病気に対応していた。そのうちの 1名は HIV の「死の病気」「ゲイの病気」「性の病気」という過去のイメージを今も持ちながら、HIV はコントロールできるもの、予防できる病として主体的に責任や義務を引き受けていった。その結果、彼は「自業自得」として自分の中に病気を意味づけ、自己嫌悪に陥った。彼は自己責任を担っていく孤独と未だに消えない過去のイメージを持ち続けて今を生きている。

第二に、本事例において、彼が抗 HIV 薬をやめるということは、死期を早める選択ではなく、自分の<生>を満たす、生きるための選択だった。彼は HIV がもたらす苦悩に抵抗し、病気になる前までの「普通」の生活を取り戻そうとした。一方、彼女にとっては毎日薬を飲むことは、<生>の可能性を広げた。薬は諦めていたものを「全部取り戻す」ことのできるモノだった。

第三に、他者が HIV 陽性者にとって様々な意味をもたらす一方で、その他者の存在が HIV 陽性者であることが露見する恐怖の対象となることもあった。しかし、彼らは人と出会うことで、自分が HIV 陽性者であることを他者に受け入れられ、「意外と大丈夫」という事を体感していった。また、自分たちの得意とすることや HIV 陽性者であることを強みとし、「自分にしかできないこと」を他者に提供し、HIV 陽性者と他者が相互的に働きかけ合う中で、HIV 陽性者である自分を認めていった。

これらの結果から明らかになったことは、“HIV 陽性者”として生きることの苦悩や葛藤だけでなく、様々な感情に揺さぶられながら、HIV に抵抗することや、HIV を日常の中に引き受けながら生きる事だった。また、社会との多様なつながりが彼/彼女らの<生>に新たな意味をもたらした。そして、彼/彼女らの生に向き合う私たち自身が、直接的に支えることの意義が問われる。

「私たち」は、決して HIV 陽性者と切り分けているわけではない。私と<地続き>の彼らが、どのように他と関係を紡ぎながら生きようとしているのかを民族誌的調査によって明らかにした。